

平成 28 年 3 月号 №473

なかま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

今家墓参----- 西崎 正夫 原発をどうする----- 廣吉 正毅
「子都手留会」の活動----- 坪井 栄子 老眼----- 佐藤 天彦

『なかま』の歴史を訪ねて

田中 修司

先般、当ても無くふらりと図書館に寄ってみた。

平日だったので、学生らしき人は見当たらないが、リタイアした方かシニアらしき男性が多く、何か難しそうな分厚い本を熱心に読み耽っており、館内は静けさが漂っていた。

そんな中を足音を忍ばせ、当ても無い目的に向かつて書棚に目を配りながら彷徨い歩くこと暫し。
ふとしたことから、ある書物に目が留まった。
黒の分厚い立派な表紙で出来た過去の『なかま』の集約本である。

これには、平成7年4月号から13年10月号までが収録されており、この前後について照会してみたが「保管なし」とのこと。

そこで、手元の資料と併せ

て『なかま』の歴史を模索してみた。

昭和51年11月

当時の市民カレッジ「長寿大学」が「長寿大学ニュース」として初刊を刊行。

昭和52年5月

現「佐倉市民カレッジ」が開校し受け継ぎ、「高齢者だより なかま」と改称。

平成9年・平成20年

(社)日本善行会から二度に亘り、善行賞受賞。
『なかま』と改称。

そして、当月、473号の

刊行を迎えることになった。
『なかま』は、初刊号から1号も欠かすことなく発刊出来たことは、偏に市民の皆様
の暖かいご支援の賜物と厚く御礼申し上げると共に、ここに『なかま』の面影を偲んで、懐かしの場面をご披露しておく。

(編集委員)



高齢者だより「なかま」編集会議が、長年にわたる善行活動の成果として平成9年度成人善行表彰を受賞いたしました。

<p>高齢者だより 300号記念</p> <h1>なかま</h1> <p>平成13年10月</p>	<p>佐倉市立中央公民館</p> <p>なかま編集係</p> <p>佐倉市鎗木町198-3 TEL 043-485-1801</p>
---	--

今家墓参

今東光は佐倉市ゆかりの作家である。

私が志津地区にある今家を訪れたのは、今から20年ほど前で、今先生はこの時すでに亡くなられていた。

奥様から種々のお話を伺った。先生が二十歳の頃、ニセ一高生として、高名な漢学者であった塩谷温博士の講義を「盗講Ⅱ東光」とダジャレて受講。しかし塩谷先生からは「ニセだが極めて優秀」とのお誉めのお言葉。

この漢学が、後に『支那文学大観・桃花扇』や『今氏易学史』の出版となった。

今先生の座右の本である『論語』から、上志津小学校に「學不倦」（学びて倦まず）の書が、扁額にして贈られた。また「古典を引用の場合でも全文引用ではなく、文字を少し変えるとよい」とおっしゃっていたという。

なるほど松尾芭蕉の『奥の

細道』巻頭の「月日は百代の過客」や平泉の「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」でも忠実な引用ではない。

そうなら「學不倦」について、『論語』原文では「学びて厭わず、人を誨えて倦まず」である。「學不倦」とは「子供達は学んで厭わず、教師達は誨えて倦まず」の要約（意味の深化）なのだろうか？

今東光資料館が一昨年、大阪の八尾市にオープンした。次は岩手県にでも文学館ができるのであろうか？

今東光文学研究会誌『慧相』が毎年発行されている。佐倉市の図書館に所蔵されていないのが残念である。

さて、今先生は昭和52年9月19日に亡くなられ、奥様は平成20年9月19日に亡くなられた。今年もご命日には上野寛永寺への墓参である。

（石川 西崎 正夫）

原発をどうする

先だって川内原発1号機の運転が再開された。だが福島

の事故のことを考えると、おいそれとはいかない。この事故がいつ終息するかの見通しさえ立っていない。核の不具合は今の技術では手に負えないと言ふことなのだろう。まさに厄介な暴れ者であることよ。核の危うさを考えると人と共存は難しいと思うが。

そんな中、福島の様々な問題を解決せずに、停止中の原発を川内原発と同様に運転を再開させようとしている。運転を再開すれば思わぬ事故のほかに高レベル放射性廃棄物もどんどん溜まっていく。肝心の最終処分地の目途も立っていないと言ふではないか。

ちよつとここで振り返ってみる。国民と核との不幸な出会ひのことである。広島、長崎、次いで第五福竜丸。今回は福島原発が放射性物質を外

部に放出し、人と環境に深刻な影響を与え続けている。このように国民は戦前と戦後にかけて世界に例のない4回もの被ばくをしたことになる。

ところで関係者は、こういった事件・事故の関連情報をこれまで、適時適切に私たちへ提供したと言えるだろうか。片や私たちは核のことを真剣に考え、しっかりと理解したと断言できるだろうか。

日本は、議会政治の国である。国民の声は国に届かなければならない。といった環境にあつて、改めて原発の運転再開を止めるにはどうしたら良いのだろうか。だからといって私には特別な事は出来ない。だが、次の選挙では自分の考えに最も近い候補者に投票することは出来る。

今、核に替わるエネルギーを模索しなければならぬことだけは間違いないと思った。

（ユーカリが丘 廣吉 正毅）

「^しっ^てる^かい」の子都手留会」の活動

平成22年『なかま』9月号に、私の「佐倉こどもかるた完成へ」という文を載せて頂いた。市民カレッジ16期のグループ「子都手留会」の私達は、「まちづくり」の課題として「佐倉こどもかるた」を制作してこれを携えて普及活動をしてきた。2年半程を費やして推敲を重ね編集してきたかるた文に絵を描き、パソコンで処理したものを、切ったり貼りつけたりの全くの手作りのかるた2箱を持って、活動の第一歩を踏み出したのが平成22年のこの頃であった。

以来5年余りを経た今年度同時期、活動回数は90回台を数え、今後予定されたものをこなしていくと年度内に100回を達成する事となる。記念すべき節目として私達会員一同深く感慨にふけるばかりである。

次代を担う佐倉の子供達に

(新日井田 坪井 栄子)

老眼

若いとき 若いときは老眼ならず。新聞を読む、本を読む、パソコンをする、ネットをする、スマホをする、自在なり。老眼鏡を掛ける必要はない。眼鏡を掛けることなれば、行動に制約少なし。行動に制約なきことは若いときには気が付かない。老眼になって初めて気が付くものなり。

老眼の不便 老眼になれば結構不便なり。まず眼鏡を探す手間がかかる。眼鏡を何せず手間がかかる。眼鏡を何せず手間なく手に入れるためには、自宅に○組、その他自動車内、職場、鞆、服内に○組、合計○組ほどが必要となるらむ。老眼になると、近くの物が見えにくいのでいろいろ問題を起こしやすい。大事なことを見逃しやすい。目のよかつた人は逆に老眼になりやすい。

老眼にならぬ LED灯は

眼によくはない。統計は出ていないが、視力が落ちやすい。蛍光灯も眼によくはない。これは確実近眼になり、また老眼にもなりやすい。公表すべし。眼により光は午前中の太陽の光。その太陽の光を照明器具にしたものあり。これを用いれば、老眼になりにくい。値が張るが眼の健康のためには必要経費となるらむ。安くは白熱球あり。さらに眼の体操すべし。眼球はいくつもの筋肉により支えられている。その原理を知りて、眼の筋肉動かすべし。眼の周辺を磨くべし。何事によらず、気を入れてやることは眼にもよい。眼をよくしたい、何よりも老眼にはならぬという決意こそ、行動の熱源(マグマ)なり。

(宮前 佐藤 天彦)



3月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鐺木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集し、市民カレッジ情報コースの卒業生が文字入力を行っています。

さくら道

私の楽しみは観劇です。演劇、ミュージカル、歌舞伎などの舞台を、劇場で観るのが好きです。音楽の生演奏や出演者の表情、動きなどが直接感じられ、感動が増大します。10年程前、公益財団法人「都民劇場」の会員となり、それ以来定期的に都内の劇場で観劇を楽しんでいます。

この1月には明治座で、二人の女性演歌歌手による新春

公演を楽しんできました。

観劇は、幕間の弁当や売店でおみやげを選ぶのも楽しみです。また、劇場への行き帰りも楽しみの一つです。帝国劇場の場合は、ユーカリが丘から東京駅迄高速バスに乗り、駅地下の食品売場でおいしい物を探します。帰りは、都会の雰囲気になれながら銀ブラして東銀座駅に向かいます。

観劇は、これからも私の元気の源となりそうです。

（櫻田 弘美）

あとがき

今年も、早3月になった。1月、いぬ（往ぬ）、2月、にげる（逃げる）、3月、さる（去る）と言って、1〜3月はあつという間に過ぎ去ってしまった。

3月と言えば、先ず「決算期末」のことが頭に浮かぶ。入社した頃の算盤片手に深夜に及ぶ残業や、営業成績の最後の積み上げに追われるなど慌ただしい月であった。

頭に浮かぶ3月の言葉。年度末、人事異動、春闘、確定申告、卒業式、入学試験、春分の日、お彼岸、雛祭、桃の節句、春休み、啓蟄、春一番、ホワイトデー、等々。

因みに、3月の誕生花は、菜の花（快活）、勿忘草（私を忘れないで）、木蓮（崇敬）だそう。

昨今、私の3月は、ユズ、ミカンの剪定を為るぐらいのことである。

（若岡 照秋）